

校長室からこんにちは

令和5年10月27日（金）



子育てはいつの間にか終わっているもの

今週水曜日、就学時健康診断がありました。

園児にとって、広い校庭、大きな校舎…子供は、つないだ手が離れると、お家の人のバッグや裾をつかみます。小さい子供たちは、期待と不安の表情でした。ほほえましい親子の様子を見ると、いつも思うことがあります。私は自分の子どもと最後に手をつないだのはいつだったかなと。子育ては、いつの間にか、そっと終わっているものなのかもしれません。



蝶の幼虫は、餌がなくなると、まだ成長しきっていなくてもサナギになってしまいます。サナギになってしまったら栄養を足してあげることができません。むしろ、からだは液状なので、触れると蝶になれないこともあるのです。小さいうちにどれだけ栄養を取らせてあげるか、それが立派な蝶になるために唯一できることなのです。笑顔の子供たちを見ていると、思春期というサナギのような年齢になる前に、心にたくさんの栄養を蓄えてほしいなと思います。だから、一番子供の近くにいる人はもちろん、周りの大人はみんな子供の心に栄養を届けてほしいなと思います。思春期でも笑顔の絶えない子…それは、周りの大人、特に一番近くにいる人が笑顔だからです。自尊感情はこうしてはぐくまれていきます。

抱っこをしなくなっておんぶに変わり。おんぶをしなくなると手をつなぎ。そして、やがて手をつながなくなる時が来ます。そうなったら、子供に任せてあげてください。あれやこれやと細かく指示するようなことを言うと、子供が独立する年齢になったとき、「あんなこと言うんじゃないかった」と親自身が後悔することになります。孫に甘くなる…それは、自分の子育ての反省から、孫を通して、親としてのやり直しをしているののかもしれません。

私はまだ孫はいませんが、きっとそうなるだろうなと思っています。

